
シンデレラの呟き

akka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラの眩き

【Nコード】

N1751I

【作者名】

akka

【あらすじ】

りあは親の七光りで有名。だけど、学級委員・長谷部の一言から、りあの運命は大きく変わりはじめて・・・

Take・i 一人のクラスメイト

実香乃りあ、15歳。普通の中3であり、普通の女。だがしかし、母が超有名女優・実香乃ルリであることは、普通ではないのは確かである。

…ある日のことだった。

「今度、学芸会があるのですが、何をやりたいか、意見はないですか？」

え、私は言いたくない。だって私って、お母さんが女優ってことだけで有名で、私はただのオマケだし。それに、私っていつつ、ほんと教室の片隅にいるだけだから、こんな所で意見を言うなんてありえない。

「もう…誰も言わないから、学級委員の長谷部さん！何か意見はない？」

「私は…劇がいいと思います。それも…“実香乃さん”が主役で…う…うそっ。私が劇の主役だなんて!!」

「あ、あの…長谷部さん、なんで私なんですか？」

あわてて私は言う。だけど、長谷部さんは冷静に、
「あなたって、教室の片隅にいるけど、実際やってみれば、こういうこと、似合いそうなもの。それに、たまにはこういう風に、晴れ舞台に立ってみてもいいんじゃない？」

確かに、長谷部さんの言う通りかも知れない。それに長谷部さんは、私を“実香乃ルリの娘”としてではなく、“一人のクラスメイト”として見てくれている。

Take・2 シンデレラとお姉様

「実香乃さん！！そこはもつと感情を込めて！！」

あれから、一週間。私は、『シンデレラ』の劇をやることになった。もちろん、私がシンデレラ役。でも、やっぱり、演劇のレッスンを厳しいんだなあ……。でも、長谷部さんに推薦されたからにはがんばらなきゃ！！

「『ああ…私も、お姉様たちと一緒に舞踏会へ行きたいのに…』」
一つ一つのセリフや動きを、頑張つて覚えていく。

「ええ！！実香乃さん、今の感じよ！！今みたいに、感情をコントロールできたら、最高の舞台になるわ！！」

演劇部部長の、野崎さんは、厳しいことでも有名だけど、ただ厳しいだけじゃなくつて、上手くできた時はちゃんとほめてくれる。だから、私もやる気が出るんだ。

「『どうして…、どうして私は、舞踏会へ行けないの…？』」
どうしよう！！泣けない！！

「ストップ！！実香乃さん！！」
野崎さん！？

「今のところ、予定では泣くことになっていたけれど、泣かなくてもいいかも知れないわ！！」

えっ！？何で！？

「部長さん！！何ですか？！！」

「だって、あなたのその、『泣きそうだけど泣けない顔』に感動したんだもの！！普通に泣くより、その顔のまま泣かない方が、きっと上手いくわ！！」

そして、次の日。

「そういえば、他のキャストのみんなを紹介してなかったわね。魔

法使い役の、月嶋さん。姉役の北神さんに、加瀬さん。あとは…」
「王子役の、王ノ宮ルイです。」
「キヤアー…？王ノ宮くんって言えば、演劇部でも、有名な部員さん
！！しかもモテるってうわさの…！！」
でも、見てみれば確かに、カッコイイかも…

Take・3 ドキドキ王子の笑み

「『王子様…、いつまでもあなたと一緒にいたいけれど、12時になれば、私は帰らなくてはならないの』」

「『なぜですか？私は姫とずっといたいのに…』」

今日は、王ノ宮クンと、二人で練習中です。ダンスのシーンが難しくって、なかなかうまく行かないんだあ…。

「ちよつとまっつて、りあ。」

えっ、え？！い、いいいいっ…、いきなり名前呼びいいい？！

「えええつと、ななんですか？！」

すると、王ノ宮くんは、クスツと笑って、こういった。

「テレちゃって、カワイイね…。」

も、もうー！！人のことからかわないですよおお！こつちだつて驚くんだもん！！

「僕はさ、そーゆー純粹でカワイイ女の子って、好きだけどなあ…。」

「

「何言ってるんですか？！王ノ宮くん！！」

「それよりさ…。」

ちよつと、さっきの悪魔のような笑みとは違って、少し真剣そうな顔をして、こう言った。

「りあ…、昔は、もつと内気で暗いやつだったのに…、どうしてそんなにカワイクなつちやつたの？」

は、はああ？！私、王ノ宮くんなんてこの学校で初めて知つたのに、昔って何？！私が暗いつて言われてたのは、それこそ幼稚園くらいの時から、小学校2年生くらいまでの間だよ！！でも、同級生に王ノ宮くんなんて人いなかったし…。

「ねえ、王ノ宮くんは、私のことをどうして知ってるの？」

…すると、少し間をおいて、王ノ宮くんは、

「言えないよ…。」

と言った。

「ただ、このまま気まずい雰囲気にいるのはちょっとなあ…。思った私は、とつさに、こういった。」

「ね…ねえええ！！げ、げげ劇の練習やるおよ？！」

「恥ずかしくて口が思うように動かない。しばらくして、王ノ宮くんは、まるで私がシンデレラかのようにた、こう言った。劇にも無いセリフを。」

「『僕は、シンデレラのことを、世界中の誰よりも愛しく思っています』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751i/>

シンデレラの眩き

2010年10月11日15時48分発行